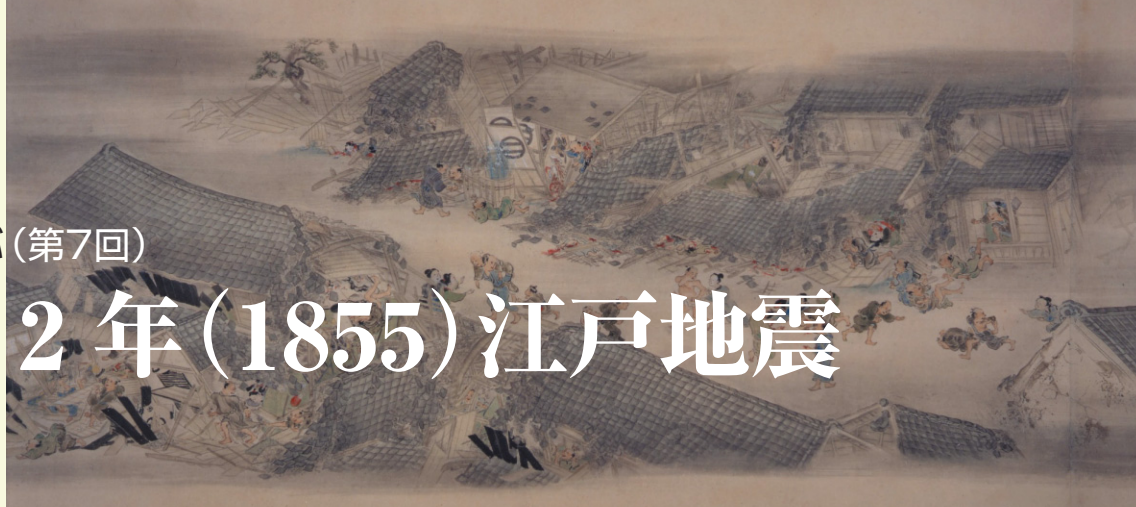


過去の災害に学ぶ(第7回)

安政2年(1855)江戸地震



■「江戸大地震之図」

東京大学史料編纂所蔵

はじめに－江戸地震の概要－

安政江戸地震は、安政2年10月2日夜四ッ時（太陽暦では、1855年11月11日21時30分ごろ）に発生した。震央は東京湾北部、地震の規模はM7.0～7.2、震源の深さは40～50kmと考えられる。

被害は江戸市中を中心に埼玉、千葉そして神奈川県に及んだ。しかし、震度6以上の激甚な地震動の地域は、江戸市中とごく周辺の町々にとどまった。死者数は、地震動による家屋の倒壊と火災により、丸の内、本所、深川などで確認された人数が7,000人を超すとされる。しかし、実際はそれ以上にのぼると考えられる。

安政江戸地震から今年で151年目となる。この間、安政江戸地震と同じようなタイプの東京直下の地震としては、明治東京地震（1894年）のようなやや規模の大きなものもあったが、被害はかなり小さい。150年以上もの間、震度6強を与えた直下の地震が発生していないことは、次の大地震を考えなければいけない時期にきていることになる。

江戸市中の被害

大名小路（現在の大手町、丸の内）、本所（現墨田区西部）、深川（現江東区南部）そして吉原など軟弱な地盤では、多くの家屋が倒壊した。

和田蔵門前、老中阿部伊勢守（福山藩）上屋敷をはじめ小笠原左衛門佐（越前勝山藩）上屋敷、松平相模守（鳥取藩）上屋敷では住居半潰、長屋皆潰の状況であった。増山河内守（伊勢長島藩）上屋敷にいたっては、住居は残らず潰れ、門はほとんど潰れた。さらに、西の丸下、馬場先門内（現皇居外苑）では、老中牧野備前守（越後長岡藩）上屋敷、酒井右京亮（越前鞠山藩）上屋敷では住居全半潰、長屋皆潰の状況であった。P13の『大都会震焼双六』（「懐溜諸屑」十一）には、各地の被害が的確に描かれており興味深い。

本所では、津軽越中守（津軽藩）上屋敷（現墨田区緑図書館）は御殿、屋敷など半潰れ、南の長屋残らず潰れ、という状況であった。また、尾上町（両国）の料理茶屋中村屋は、風流な尺角柱の二階建てであったが、潰れて即死のものが多く出た。歌舞伎役者中村鶴

蔵（後の三代目仲蔵）もひいき客の招待でこの場に同席。客とのやりとりに、二つの大きな揺れが入り、地震の震源が深いとする考え方を引き出した。

深川の老中久世大和守（関宿藩）下屋敷（現清澄庭園）では、住居、内・外長屋4棟、土蔵3か所皆潰であった。また、三十三間堂（富岡町）は1/3を残して、潰れてしまった。

これらの地点は、日比谷の入江を埋立てたところであったり、隅田川の氾濫原を17世紀中期以降に開発したところであった。軟弱な地盤では、地震動は増幅され、建物の倒壊や地割れなどの被害を引き起こした。

一方、江戸の前島に位置する、日本橋から京橋、新橋では、大きな被害とはならなかった。西河岸（現千代田区八重洲）の家主、城東山人は自宅にいた。周辺では土蔵は崩れたが、家々は庇が落ちて、傾いただけですんだ、と記録している。

この様子は、日本橋、江戸橋などでも同じであった。

台地上でも同様な状況であった。松平伯耆守（丹後宮津藩）上屋敷（現霞ヶ関、財務省）では、住居と長屋は所々損、土蔵は7か所大破、そして土塀が震い潰れた。また、井伊掃部頭（彦根藩）上屋敷（現永田町、憲政会館）では、表長屋の塀が所々損、表門は無事、ということで、大名小路の様子とは大きく異なった。

この江戸市中の被害の様子を、さきの城東山人は「今度の地震は、高地はゆるく、低地はきつい揺れであった。その様子は青山、麻布、四谷、本郷、駒込の辺りの高地はゆるく、御曲輪内、小川町、小石川、下谷、浅草、本所、深川の辺りは大きな揺れであった。これは自然の理である。」（『破窓の記』）。この言葉は、被害の状況を正確に言いあてている。同様に『大都会震焼双六』の絵も的確であったといえることができる。

関東地方の被害

江戸市中の低地は激甚な揺れに見舞われたが、周辺の村々は家の庇が落ちるなどの軽微な被害ですんだ。水戸市内では、「稀なる大地震」と感じるくらいの揺れで、土蔵のはちまき、瓦屋根の一部落下、そして女性などは歩行困難をきたした（『大高家日記』）。佐倉

城（現千葉県）内では屋根瓦の落下、土塀の転倒、地割れがあった（『年寄部屋日記』）。藩内の村々では百姓家の潰れ、破損285軒が記録されているが、かなり広い範囲のことで具体的な村名までは特定できない。

神奈川宿では本陣や旅籠も多く潰れ、半潰れの状況であった。また、片瀬村（現藤沢市）にあった陣屋が大破したことが記録されている。詳しい被害の内容は記されていないが、大工・木挽・家根師・左官などを手配した様子が窺える。

首都圏でも軽微な被害が生じていたことが確認されるが、その範囲は水戸市、熊谷市、小田原市の枠を出ない。それらの地点でも、具体的な被害が記録されていないことが多い。

そして、この地震の有感範囲は、北は青森市、西は大阪府、京都府北部に及ぶ。

火災の発生

火災は市中の30数か所から起り、大名小路、吉原、本所、深川そして京橋で延焼した。地震の後、10月4日から町奉行井戸対馬守の指示で調査が行われた。その詳細なまとめが『安政地震焼失図』として残されている。その図面を基に焼失した面積を算出すると、1.5km²となることが明らかになった。この面積は、東京ドームの32倍の広さにあたる。

地震のあった10月2日は、午前中は小雨、午後には止んで、夜にはわずかに風が吹いていた。また、四ツ時の地震であったことから、市中の人の多くは寝床に入っていた。このように延焼を抑える気象状況と時間であったにもかかわらず、これだけの地域が焼失してしまった。

火災の発生した場所は、地震動の烈しいところとはほぼ一致するが、京橋は江戸の前島と呼ばれる地盤の固いところであり、揺れは大きなものではなかった。それにも関わらず、0.15km²が焼失した。これほどの大火災となった理由は、明らかにされていない。

一方、地盤の柔らかい水戸藩上屋敷（現後楽園）は烈しい揺れに襲われた。そこで、火災の発生を食い止めた女性がいた。女性の名は西宮秀、前藩主水戸斉昭公の奥方に使える立場の人である。彼女は地震のすぐ後、周囲が落ち着くの見計らい、「御殿へ引き返し、御手あぶり、御あたため、火鉢など火の本あぶなく、そのまま御泉水へ投げ込み、金魚や緋鯉はふびんに思うけど、致し方ない」（『落葉の日記』）と、とっさの行動に出たのである。とにかく、水戸藩屋敷からは、火災は出さずにすんだのである。

地震防災への教訓

幕府は地震後すぐに、炊出しなどの救済措置をとることになる。その様子については、当時南町奉行所与力・佐久間長敬の記録が詳しい。茅場町（現中央区）の屋敷で地震に合った長敬は直ぐさま奉行所（現有楽町）へ急いだ。奉行所では、短時間のうちに与力・同心が集まった。早速評議し、9項目の対策を短時間のうちに決め、早速実行に移していった。

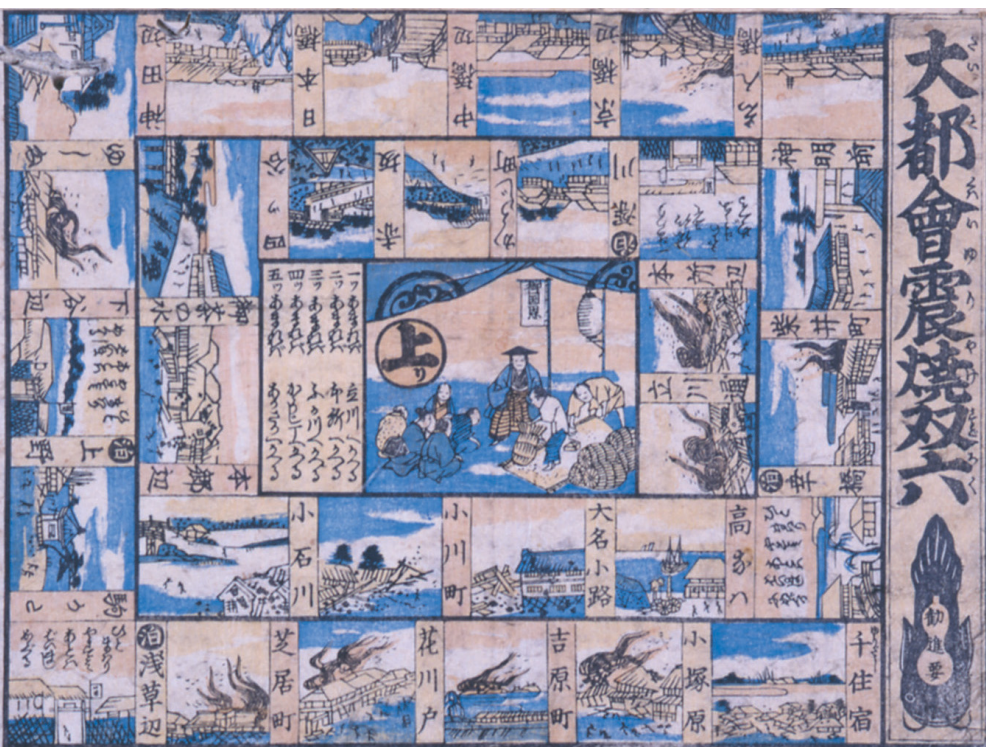
そのうち現在でも重要と思われるものを、以下に3項目あげる。

1. 被災民への炊き出し握飯の配布のこと
2. 御救小屋を建てること
3. 怪我人を速やかに救済すること

御救小屋は浅草雷門前、上野山下、深川海辺新田、深川永代寺そして幸橋門外の5か所に建てられた。

また、吉原では1,000人あまりの死者が出た。その多くは唯一の出入口、大門に殺到したためであった。遊郭は遊女が逃げ出さないよう堀に囲まれていた。そこには、緊急時に下りる反り橋が数か所にあったが、この時には下ろすことができなかった。破損していたのか、錆ついていたのか、事実にはわからない。多くの人の集まる場所の増えた現在、この経験が生かされることを望みたい。

（株）防災情報サービス 中村 操
「災害教訓の継承に関する専門調査会」
小委員会委員（安政江戸地震分科会委員）



■「大都會震焼双六」（『懷瀟諸屑』十一）

国立歴史民俗博物館所蔵